

《論文》

細分化してゆく力と 統合してゆく力

——小島信夫「別れる理由」論序説——

正 田 雅 昭

〈要旨〉小島信夫「別れる理由」は、「抱擁家族」と並ぶ代表作でありながら、その異様な連載期間の長さ、奇矯と思えない物語展開のため、江藤淳、坪内祐三などのわずかな例外を除いて、詳細な分析の組上に上げられていない。本論は、全体像を三つのパートに分け、その内の最初のパートを中心に、一見無関係に見える断片化した断章群がいかなる形で、「小説」としてまとめられているかを考えようとするものである。

そこで、この小説を読む補助線として、【象徴的接統のベクトル】【交換可能な接統のベクトル】【微分的接統のベクトル】【積分的接統のベクトル】という四つの概念を提唱し、これらの「ベクトル」によって小説がどのように「統一」たり得ているかを検証し、小島がこの作品を通じて、後期の前衛小説群の在り方をどのように見出していたのか、その一端を明らかにした。

「別れる理由」は、「抱擁家族」と並んで小島信夫の代表作であることは言を俟たない。だが、「別れる理由」は、その膨大な長さ、内容や形式の理解の困難さから、「抱擁家族」に比して、まとまった論は殆どな

く、多くが印象論的な批評・エッセイの類に留まっている。

坪内祐三の『別れる理由』が気になって『二〇〇五・三、講談社』は、『群像』の二〇〇二年五月から二〇〇四年四月までの間に、断続的に連載されたものであり、詳細かつ分析的に向き合った論考として、今日に至るまで「別れる理由」の読み方を大きく規定している。

坪内の論の特徴の一つは、初出時の異様な長さを正面から問題にしていることにある。単行本になるまでの十五年近くの歳月を考えた時、物語の時空と実時間の時空はどんどんズレてゆくはずであり、そのズレを読者はどう受け取り、そして実時間の時空をどう読みに反映し得たか、その可能性（不可能性）を詳細に検証しているのだ。

後で詳しく述べることになるが、一九八二年に単行本として上梓された際、全体はⅠ巻からⅢ巻の三分冊とされた。ほぼ、同量の厚さで分冊されたこの分け方は、もちろん事後のものではあるが、実はそれほど内容ときっちり重なっている訳ではない。だが、事後的な見方であったとしても、全体の内容を大きく三つの位相で捉えることは可能だ。多くの人物（家族）たちの入り交じった不貞関係や人間模様を、永造という人物の視点を中心に描いた一部。永造の妄想からそれまで登場した様々な人物たちが、劇場の中で入れ替わり立ち替わり、奇妙な会話劇を繰り広げてゆく二部。そして、永造が物語全体の外部に出て、これまでの物語について、実在の人物たちと話し合うという三部。

これら一から三部は、Ⅰ巻からⅢ巻という分冊とは微妙なズレをはらんでいるが、もちろん作者・小島信夫も、全体の長さを最初から想定して連載していた訳ではないだろうから、むしろ当たり前のことだ。

本論も、事後的な分冊ではなく、この内容に準じた三部構成を対象に議論を進めてゆこうと思う。ここで問題にしたいことは、三つある。ま

ず小島信夫がこの長期にわたる連載において何を掴んだのかということだ。論者は、「別れる理由」そのものは全体としてみたときに、達成点は多かったが、その分犠牲にしたものも多かったのではないかと考えている。それでも「別れる理由」を考えることは、小島の晩年のテクストを読解する上での重要な手がかりを得ることであるのは間違いない。

もう一つは、何の関係性もない様にしか思えない断片性の強い話が、どうして、作者によって、それぞれのまとまり(三つの部)として提示されているのか。逆に言えば、我々読者は、目の前の断片群をどのように統一すべきなのか。

残るもう一つは、各断片がそれぞれの部の中で統合されているのだとしても、その三つの部はいかなる形で一つの「別れる理由」という話として纏まっている様に結びつくのか。

これらの問題の全てを一つの論考で語り切ることは出来ない。そこで本論では、多くの論者が注目する第一部を中心に考えてみたいと思う。そこから全体に対する「統合する力」の端緒を掴んでみたい。

1 「平行世界」の重なり方

十二年間、一九六八年一〇月から八一年三月まで通算一五〇回に渡って講談社の『群像』に連載された。単行本の第Ⅰ～Ⅲ巻は、一九八二年七月～九月に刊行されている。

Ⅰ巻は、六八年一〇月から七二年八月、Ⅱ巻は、七二年九月から七七年一月、Ⅲ巻は七七年一月から八一年三月。

「町」というタイトルであった物語が、十回目に相当する六八年一〇

月から「別れる理由」となり、以後「町」というタイトルもしばらく残り続ける。つまり、「別れる理由」(そのX)と「町」(そのX+九回)という二つのタイトルが併記されているのである。この併記が統合されるのは、一九七三年九月「別れる理由」(その六十)になって以降である。「町」の第一回「山へ登る話」から第九回「ある日、町を出て」(「ワラビ狩り」と改題)が、短編集『ハッピーネス』になる。

坪内の指摘の通り、「町」の第九回の原題が「ある日、町を出て」であり、その「町」が小説の「町」と重なる、それまでの小説世界の「外」に出てしまったのは興味深い。吉村は前田永造、頼子は京子、道子は恵子になるので、ある意味で設定だけは同じなのに別の「平行世界」に移動してしまったのである。

例えば、「町」の最後のエピソード「ワラビ狩り」は、「別れる理由」の第七章の途中から語り直される。そのエピソードの終盤で語られる恵子の話が、永造と京子に感動を与える。

二人であれこれしゃべっているうちに、結論はこういうことになった。

恵子が夫の会沢の子を身ごもって、トンネルの中を歩いているというところ、そしてその二十年も背の話を、会沢に対するグチのあとにまるで天啓のように、話がマトマツて車の中の彼らの間に落ちてきたこと、そのことのせいなのかもしれない、と。

「こういう話なのよ」

(I 79)

だが、「こういう話」が恵子からどう語られたかは、不明なまま会話は、まったく違った話題に移ってゆく。そして、この「話」は、章の最

後に永造によって語り直される。

この章の前半は、「タイム・トンネル」という「子供向きのテレビカラー劇映画」の話から始まる。その番組が京子によって別の番組に変えられて、永造は庭に居る犬に餌をやりに行くという話に繋がったあとに「ワラビ狩り」のエピソードが入る。

「タイム・トンネル」という子供向きのテレビカラー劇映画が自の前ではじまった。同じものを、さつきまでここにいた山上の坊やの睦郎も自宅で見ている。

(I 69)

こうして見てみると、この章の前半部のエピソードと後半部のエピソードは「トンネル」という表象で接続されていることが分かる。現在の情景は「タイム・トンネル」という番組を観ている最中であるが、そこで永造に想起されるのは、以前にみた同番組（航空機の墜落事故）であり、さらにそこから連想される、バスの転落事故にあった知り合いの出版社の社長の話である。そして、その姿を自己と重ねてみたりもする。

一方で、トンネルで恵子によって語られたエピソードは、夫婦によって語り直され、それがさらに妻の言葉から永造の言葉に語り直される。

「恵子さんたちといっしょに汽車をおりた連中の中には、一般の人に混って兵隊さんがいたのだそうですよ。たぶん軍属もいたでしょうね。あの頃の日本内地のことはよく知らないけど。関西から東京府下へ辿りつくのに五日もかかっていたというわけです」

と永造は恵子の話した話を自分ふうに話した。永造はそうい

うふうに眼に浮ぶように話したいと思った。

(86)

I 巻において語られる夫婦の物語と呼応する「平行世界」の例として「抱擁家族」とのそれが思い浮かぶ。俊介は永造、トキ子は陽子、良一は啓一、のり子は光子、家政婦のみちよはさとのと名前が異なるだけ、両者とも設定は同じである。

坪内は、「抱擁家族」と「別れる理由」をネガポジの関係と評している。つまり、片側で描かれなかった出来事が、もう片側で描かれているということだ。例えば、「抱擁家族」では、ジョージとトキ子との不貞が描かれながら、俊介が過去に犯した不貞については、俊介の台詞の中に暗示されるだけで、その内実は語られることはない。一方、「別れる理由」(33章から41章)では、陽子とポップの不貞は詳細として描かれることなく、永造と恵子の不貞に関しては克明に描かれている。

だが、一方で「抱擁家族」におけるみちよが、物語で重要な役割を担っているように⁽¹⁾、「別れる理由」におけるさとのも、全く同じ設定（人間関係の中で、同じ様な役割を担うことで、二つの「平行世界」の重なりは強まる。

実は、こうした関係は、「別れる理由」と重ねられる全ての平行世界にも言えるのである。「町」にあった「ワラビ狩り」のエピソードで語られなかった会話が、「別れる理由」で語られる一方、細かい出来事が「ワラビ狩り」では描かれなかったりする。こうした「補完的關係」によって、様々な外部テキストに結びつけられながらも、内部の話題は、会話の中の一つとして、途中まで語られ、またしばらくして、語り継がれたりする。

さらに、同じ章の中で（時には章を越えて）、同じイメージ（象徴）か、

その繋がりによって、重ねられたりもする。

登場してくる人物たちは、その夫婦関係だけに限定して考えても、多くの「別れ」を経験している者たちばかりである。だが、ここで、タイトル「別れる理由」を想起してみると、物語の中では、むしろ、今のパートナーと「別れぬ理由」が語られているようにすら思える。一方で、過去のパートナーと「別れた理由」が、それぞれ詳細に語られるというわけでもない。

話題が次々と無関係に変化してゆくには幾つかの理由がある。一つは、それがとりとめない会話であるからだ。この会話は、全部で数時間の会話なのだが、その数時間の会話で三巻全体の三割ほどを占める。

第10章で「七時のニュース」、第32章で「八時から始まるチャンネル3の画面」が出て来るということは、ここまでで一時間程度。前者が一九六九年七月、後者が一九七一年五月なので、一時間のエピソードが二年間で語られていることになる。物語は、一九六八年の夏のどこかの午後、山上絹子と前田夫妻の三人の会話から始まるがこの絹子が帰宅するのが恐らく46章であり、47章は、夫婦の寝室の場面になるので、午後の数時間の会話は、およそ四年間かけて連載されていたことになる。

その後Ⅱ巻になっても、家政婦さとの妹である悦子と永造の会話（陽子の生前だと推測される）と妄想が48章から50章。永造と京子が伊丹（京子の前夫）の家に行くエピソードである51章から53章までは、語り手による過去のシーンであると考えられるので、語りの現在は動かない。しかし、学生運動がなく静かなキャンパスの研究室で仕事をしているという54章（ここは、一九六八年であると考えにくいので、時制が連載時の七三年あたりまで移動したか？）からボーリング場でのエピソードが語られる58章まで確定出来る語りの現在は消失する。

とりあえず、48章から58章までのエピソードを回想場面と考えてみて、我々読者に与えられる情報は、数時間の会話以上のものがある。それは、Ⅰ巻で内的焦点化されるのが永造のみであり、会話の間に、永造の記憶や妄想の喚起が挿入されるからである。実時間でなされる会話は、比喩を中心とした象徴的連想によってエピソードを伝える端緒となる場合と、断片的に見える各エピソードをその象徴的機能で繋げてゆく機能を果たす場合がある。こうした断片化とは逆のベクトルを形成する力を【象徴的接続のベクトル】と呼びたい。

膨大なエピソードが僅かな時間の中で語られるというのは、「失われた時を求めて」などの例をあげるまでもなく、小説として特異であるわけではない。だが、小島のエクリチュールの構造を考える際に、この着眼点は重要である。こうした短い語りの現在のスパンから膨大な過去の断片的エピソードが詳細な形で語られる様相を【微分的接続のベクトル】と呼ぶこととする。

2 「断片」と「小説」

Ⅰ巻から読者が得られる情報は、およそこうだ。前田永造は、前妻の陽子と死別し現在京子という女性と再婚している。息子が啓一、その妹が光子、いずれも前妻との子である。この設定は、「抱擁家族」と同様である。「抱擁家族」で話題となったアメリカ風の家を修繕しながら、相変わらず翻訳や大学教授の職を続けている。

京子の誕生日、彼女の学生時代の友人である山上絹子が家を訪れてくる。絹子も再婚であり、夫の山上もまた再婚（三度目）である。一人目

の妻は未だに戸籍を抜くことをせず、その子供に加え、何故か母までもが絹子とともに生活している。さらに、二人の妻（つまり山上の前妻）は、絹子の姉妹である。

後妻・京子は、血縁関係のない二人の子供（啓一と光子）の「母親」をこなしながらも、先夫である伊丹との息子・康彦のことを気に病んでいる。二人の子供と必ずしも上手くいっているという自覚がもてない京子は、永造の死後は前田家を追い出されるのではないかと考えている。永造は康彦を家族に迎えることを拒絶しているところか、むしろ積極的な面すらあり、それがかえって京子の悩みとなっている。

もう一人の京子の学生時代の友人である恵子も再婚であり、その夫会沢も再婚である。永造は前妻（陽子）の生前、恵子と関係があった。別れた後、再婚した京子の友達として再会したのであるが、当然、京子はこの間の事情を知る由もない。

だが、こうした出来事が物語として動いてゆくのかと言えば、全くそうではない。これらは、断片的な永造の想起によって、あるいは、京子とその友人の会話によって、読者に「情報」として蓄積されてゆくだけで、物語としての「展開」はない。基本、永造の妄想世界に沈潜してゆくⅡ巻、物語全体をメタな視点で語り始めるⅢ巻と、Ⅰ巻の物語は、通常の意味では一切接続してゆかないのだ。

三つの大きな話を構築するそれぞれの「断片」の中にある共通点は何か。Ⅰ巻においては、過去に「別れ」をもつ者たちの今「別れない」物語である。当初からタイトルが「別れる理由」であったことが意図的であったかの様に、物語は過去の「別れ」を語っていても、今の関係が「別れる」か「別れない」かは一切語られない。様々な姦通・不貞が隠されている関係であり、それぞれに大きな不安や不満を抱えている夫婦たち

には、「別れる理由」は幾らでも存在する。だが、物語レベルでは別れないのである。

物語を背後で支える一つが「姦通」「不貞」であることは、言を俟たないところであるが、描かれる全てが「事実」であるわけではなさそうだ。

彼女が年齢の割には長くて細くなり方も自然で、十人に一人もそういう脚の持主はいないと思っていた。この女を誘惑する気があれば、出来るかもしれない。身体の中にそういう衝動が起きているのに驚いた。これは健康になったせいだ。身体の中で汚れた血の中にきれいな血が活臨している有様が浮んできた。誘惑の気持をこのまま維持しておいた方が身体のために一層いいし、場合によっては……永造はめんどくさいのも承知で、直接限の前の彼女とは関係なく、その段取りのことも考えそうになった。

(245)

引用は、京子と前の夫（伊丹）の間の子である康彦の担任の女教師を目の前にした妄想であるが、同様の妄想が悦子との間にも繰り広げられる。語りの現在（会話）の中から想起される話、あるいはその話の中で想起される妄想であるために、読者にとっては妄想と現実がともに同じ様な位相として記憶される。まして、語りの現在の物語が進行してゆかなければ、個々の断片の因果的關係やクロノロジックな関係は意味をなさなくなり、互いに置き換え可能な関係になる。

例えば、永造から見れば、京子と陽子は「主婦」という意味で置き換え可能な関係である。（そもそも「抱擁家族」の最終章は、トキ子の代わりの「主婦」を探そうとする物語であった。）また、実の息子である啓一

と現在の妻である京子の連れ子になる康彦を、永造が積極的に迎え入れようとするのは、永造にとってこの二人の息子が等位であるからだ。陽子はポップと姦通を犯したが、永造も恵子と関係があったという意味で、両者にとって不貞行為による「罪」や「罰」は、本来等位である。こうした互いに重なり合ってゆく様相を【交換可能な接続のベクトル】と呼ぶ。

こうした姦通の背景には、むろん性の問題があり、逃れられない性からの誘惑を主題として読み込もうとする論者もある。だが、恵子と関係をもった後、永造は、その「歓喜」を以下の様に述べる。

それはそうとしてとにかく永造は彼女なんかどうでもいいほど喜んでいた。この歓喜を早速にも誰かに伝えたい。出来れば妻に伝えたい。出来れば妻に伝えたい、というのは、どうしてであろうか。一段と高いところにいるように思えてならない。

(254)

永造は不能だったのであり、そこから脱した「歓喜」を妻に伝えたいというのである。こうした部分からは、不貞行為が彼らにとって「別れる理由」になり得ないことを、そしてこの小説が通常の「姦通小説」としては捉えられないことを雄弁に語っている。

伊丹は実の息子である康彦と上手くいっていないが、それに関しては永造と啓一の関係もほぼ変わらない。血の繋がらない子供を必死に育てねばならない絹子の姿は、京子の状況そのものである。伊丹は永造だったかもしれないし、あるいは山上だったかもしれない。永造の息は康彦だったのかもしれないし、永造の不倫相手は悦子だったのかもしれない

い。

全てが永造の「現実」から微分化されてゆく記憶と妄想は、読者によって重ねられ交換可能な関係性になってゆく。その意味で、これらの断片にその後の展開は必要ないだろうし、「現在」の夫婦が「別れない」理由も「別れる」理由も明示される必要はなかったのだ。

また、互いに交換可能な断片群にとって、彼ら彼女らが「別れた」理由も特に明示される必要もない。むしろ「別れた」理由が明示されれば、そこにある種の因果律が発生し、物語はその後の展開を要求し始める。だからこそ、過去に別れた理由も、今別れぬ理由も、未来に別れる理由も示されないのである。

むろん、この説明は元の疑問を召喚してしまう。そもそも、何故「別れる理由」というタイトルであるのか。だが、論者は、それ故に各断片は初めから断片であることを希求していたのだと思うのだ。ヒュームに従えば「理由」とは、結果から逆算されたものに過ぎない。そもそも、我々は、全ての事象に対して、理由を見つけようとするわけではない。理由とは、まず数ある事象の中から選択され、そこから逆算されてゆくものなのである。それも、原理的には、あらゆる原因は、さらにその原意を派生させてゆく(起源の無限後退)わけだから、その連鎖を断ち切るのは、恣意的判断に過ぎない。つまり、理由とは結果からつくられるのである。

だからこそ「別れる」という「結果」がそもそも描かれないのだ。理由を生み出す結果がそもそも存在していないのである。それでも、テキストの中に「別れる理由」を探するのであれば、それは「死別」あるいは、テキスト全体に偏在しているとしか言いようがないのではないか。死別はもろろんのこと、性的不能、性的誘惑、不貞行為、友人同士の裏切り、

通じ合えない家族同士の心、全てが「別れる理由」になり得ると同時に、絶対的な理由など存在し得ないのである。

結果、テキストには因果ではつなぎ得ない不思議な断片が散乱することになる。だが、これらの断片は、【象徴的接続のベクトル】あるいは【交換可能な接続のベクトル】によって、様々な方向に重ね合わされており、それこそがこの断片群を「小説」たらしめているのである。

3 停滞の十章

第47章が、絹子が帰宅した後の夫婦の寝室及びそこから想起される記憶の話であることは、前にも述べた。ここが、第一巻の終わりになることは、あくまでも事後的なことなので、この章に何らかの意味を考えることは後付けの誹りを免れないだろう。だが、前妻・陽子の夢を見て泣きながら目覚めると隣の妻・京子も泣いている。その妻を「安心」させて睡りにつかせながらも、そこで想起されるのは、恵子との過去と「ワラビ狩り」の記憶だ。それも、恵子は京子の友人でもあるので、もしその事実を京子が知れば、京子は自殺するかもしれないとまで考えているが、想起と行動は矛盾したまま進む。

48章から58章までの間の時制をどう考えるかの判断が難しいことは、前に述べた通りだが、Ⅱ巻に入ってから59章の「ゆめくさい」までの時制の不安定さは何か意味がある様にも読めてしまう。合理的に考えるならば、「学生運動がなく静かなキャンパスの研究室で仕事をしている」「春」というのは、運動がピークであった六八年や翌年の六九年とは考えにくい。さらに、「日曜日でも朝は空いている」という部分は、坪内

の指摘にあるように、ボーリング・ブーム（一九七一）を背景に読み込むべき記述であるように思われる。さらに、実際の連載は、既に四年以上の時制のズレをはらんでいる。

物語内容から考えれば、48章から50章までは、悦子（家政婦・さとの妹であり、ワシントンというアメリカ人の愛人）との会話と妄想である。永造の悦子の身体への興味は、単なる好色というよりは、ワシントン（つまりはアメリカ）を介した、欲望であると考えた方がいいだろう。つまり、ポップに陽子を奪われたことの反転としての図式である。いずれにせよ、この三章は、陽子の生前の時の話なので、記憶の想起と考えれば、語りの現在には影響しない。

51章から53章は、永造と京子が伊丹の家に、京子の残してきた息子・康彦の家出の相談に向かう話である。ここは、語りの現在に対して、後であるとも、前であるともとれるが、少なくとも想起された記憶ではなさそうだ。

54章で、「ここ数年来」は、まとまった仕事をするために研究室に泊まり込んでいることが明かされる。「その春は静かでヘルメットをかぶった学生の姿がなかった」という記述から、坪内は、「その春」を「学生運動が激しくなる一九六八年以前」と推定しているが、必ずしもそうは読めない。

「この数年来」を一九六八年からの数年来と考えた上で、「その春は」の「は」は、一九六八年以降の数年後を指すと考えることも矛盾はない。連載時の一九七三年三月を下限と考えた上で、ここを一九七一年から七三年の三月までと仮定すれば、ボーリング・ブームの一九七一年とも矛盾しない。55章から58章のボーリングの場面も、54章以降と考えれば何の問題も発生しない。むしろ、時制が過去に遡ると考える方が困難な

のではない。その意味で、「決定不可能な、奇妙な時間軸」という坪内の指摘は、以後の「時間の停滞」に関する江藤淳の見解を「フォニーのためのフォニー」と批判したこと、実はあまり変わらない。

この十章で重要なものは、むしろ四年間も殆ど動かなかった時制が、急速に語りの現在に追いついてきているということではないか。それは、短い語りの現在のスパンが四年間もかけて続けて来た【微分的接続のベクトル】の終焉を意味する。一度、実時間に追いついたかに見えた語りの現在は、そこから一気に「夢」の世界に「闖入」してゆく。以後、Ⅲ巻の「特別回」(116章の終盤にいたって突然、その章を「特別回」を称するに至る)まで、永遠と「夢」の話が続いてゆくのである。

もし、59章から115章までの膨大な章を「夢」としてみるならば、当然ながら、語りの現在(夢の外側の時制)は殆ど動くことはない。「時空」の圧縮は夢の特徴の一つである。一晚の夢が、55章分の物語を生み出しているとも言える。この時制の在り方を【積分的接続のベクトル】と称すならば、48章から58章の間の加速度的な時間変化は、時空の有り様そのものを大きく変化させる「境界」的な位置にあったと言える。

異界譚に現れる「境界」が、物語全体に対して大きな意味を持つことが多い様に、時制の「境界」としてのこの十章にも、重要な役割を読み取ることが出来る。

以下の部分、長い引用だが、江藤や坪内の指摘にもあるように、この永遠の独白は非常に重要な意味をもつ。

「もう悲劇というものはないのだ。いくらも事件として悲劇的事件はある。航空機の墜落。戦争。病死。若い者の死。ヨーロッパへ出て行って淪落の道を辿る女。出稼ぎの家の留守を守る母。公

害。授業料の値上。(中略)そういうものはいくらあってももう悲劇というものは、芝居の悲劇というものは存在しなくなった。だいたいシェークスピアの頃で終ってしまったのだ。それや日本は違う。日本の近松はあれは悲劇じゃないから。あれはあの世で結ばれるというものだから。この説はもう一般化してしまっている。われわれの死は英雄の死じゃないから。英雄というものはいないから。パロディとしてしかないから。だからわれわれは何もケジメというものがなくていいというところが、大いに必要なだが、ケジメを時々のみ出して交流しなければならぬ。悲劇と喜劇が混り合うように。二度結婚するということもいいことなのだ。ほかの男と交ることもいけないといい切ってしまうにはあたらないのだ。それは苦しい。つらい。それとこれとは、次元の違う問題なのだ。

よその男を夫とした女。よその女を女房にしていた男。よその両親から出来た子供。そういうものと暮してこそはじめて、今の時代にふさわしい気分というものが湧いてくるものだ。この考えをもつたら、もう恐いものはないようになるかもしれないのだ」

(67・Ⅱ)

研究室は「家」と離れることが出来る空間である。直前に描かれていたのはボウリングの場面、すなわち家族との合流であり、研究室の話題の前まで描かれていたのは、悦子との性の妄想すなわち、家族からの離反である。そして、研究室のエピソードを挟んで両者を接続したのは、ワシントン(アメリカ)であった。永遠は、「夫婦」「家族」といった概念モデルをアメリカから学んでいる。家族ならざるものとも、家族とも離

れて研究室で一人眠りにつく永造。その開放感の中でなされる独白は、非常に象徴的な言葉に満ちている。

「人倫は時代とともに変化する」という永造の思想はフォニーであり、それがフォニー故に物語の時間を停滞させてしまったと江藤は批判する。だが、坪内は、変化する人倫に同化しているわけではなく冷徹に見つめ続けるためのファルスとして、永造を評価している。フォニーである人倫に開き直って同化しているのか。あくまでもファルスとして軽やかに逃走しているのか。時間の停滞を否定的にとらえるのか。そこに積極的な戦略性をみるべきなのか。

『夢』『劇』『シェークスピア』『悲劇』『喜劇』『家族』『血縁』『性』と、一章におけるあらゆるキーワードが縮約されている。現実の「悲劇」はあっても、芝居としての「悲劇」はもはや存在しない。これはどういうことか。後半部の倫理の問題として考えるならば、劇への創造(想像)力とは現実の倫理の源泉であり、「悲劇」なき時代において現実を悲劇的に捉える倫理もまた存在しない。そもそも、日本には「悲劇」は存在しなかった。日本には「英雄」がいなかったからだ。英雄は「喜劇」の中にしかないなかった。喜劇の中の英雄は悲劇的な結末を迎えない。だから、喜劇的な倫理、喜劇的な英雄として振る舞うしかない。

日本の近代文学史とは西洋文学の受容の歴史でもあるが、「小説神髓」の議論を振り返るまでもなく、その源泉の一つにシェークスピアがあることは言を俟たない。シェークスピアは、小説家ではなく劇作家であり、詩人であった。だが、日本の近代文学史では、かつて最も大衆伝播力の高かった演劇や歌(詩)は後景化し、小説が文学の中心に躍り出た。その中で、家族にまつわる姦通や不貞を相対化するどころか、家族外の性のシステムを巧みに取り込みつつ発展してきた近代文学は、虚から実

の倫理を、「悲劇」という倫理を上手く生み出すことが出来なかった。

永造の言説の妥当性はともかく、確かにこれは都合の良いフォニーである様にも思われる。実際、江藤はそう批判した。だが、あくまでも物語の内部の問題として見れば、これは永造の独白である。物語は永造の視点で進む。そして、研究室(仕事場)とは、家族をはじめとする、パーソナルな領域に近いあらゆる人間関係から独りになれる空間である。永造の研究(仕事)とは、西洋(アメリカ)文学である。物語は、永造の「夢」へと沈潜してゆき、現実の時間は停まる。そこには、時空の飛躍により「劇」、あらゆる西洋の悲喜劇が召還され【積分的接続のベクトル】、演者も役も、そして性までもが様々に入れ替わってゆく【交換可能な接続のベクトル】。

4 家族の話から「別れた」理由

「別れる理由」のワシントンとは「抱擁家族」のヘンリーからの【交換可能な接続のベクトル】に置かれた人物だ。「抱擁家族」のヘンリーは、トキ子とジョージの不貞行為を、結局はジョージを養護する形で強制的に「仲裁」した。ジョージは多少の罰を受けたものの、結局は日本で経済的に成功している。その意味で、俊介はアメリカに惨敗したのである。

ワシントンとのボーリングのシーンは、まさに永造(日本)とアメリカの対決の再現の様でもある。

しばらく球の状態をかがんで眺めていたが、永造は笑をおさえ切れ

ず、

「あなたのいう通りにすると、当りますね」

といいながら戻ってきた。

「日本がアメリカを負かした！」

とワシントンが叫んだ。

「ミスター・マエダ、あなたは全くのタヌキだな」

永造は笑ってはいけないうちながら笑い続けた。

「この一本をうまくはねられたら、どうしよう。第一あの一本が残ることがプロでも難かしいのだ。しかも、それをとられたら、私は何もかも捨ててアメリカへ帰ってしまいたい。もう私は教えない、勝手にやりたまえ、きみひとりだ」

(80)

こう言いながらも、ワシントンはボーリングの技術を永造に教えることをやめない。ここには、「抱擁家族」【一九六五】と「別れる理由」【当該の初出は一九七三】の間にあるアメリカと日本の関係が反映されている。もちろん、それはアメリカに日本が逆転したなどという単純な話ではない。ボーリング場というトポスそのものが、まさにアメリカなのだから。

「ミスターマエダ、奥さんにここで会ったからといって心配いらんよ」

と背中を叩いた。永造は横限でそういうことをいい出した相手はアイマイに笑いながら眺めた。そうしてとにかくうなずいて見せることにした。短い間に彼がとった早速の表現だった。

「日曜日に学校へ出かけて何をしてるか？ それはいうまでもなく

よく働く日本人のことだからビジネスでしょう」

昨夜泊ったことはもう分っているのだろう、と永造は思った。学校の研究室から出てきたことはもうさつき車の中で話したのだから、察しはついている。青山のボーリング場のあたりを女と歩いていったといういいかげんなことをワシントンは口にしたが、不思議にあれに似たことが恵子との間であった。神宮外苑あたりを散歩して温泉マークへしけこむというのはあの頃珍らしくない出来事だった。

(85)

偶然、ボーリング場で家族に会ってしまう。永造は、日曜日にもかかわらず、家族で過ごすでもなく、研究室で「仕事」をしているはずなのだ。そこでワシントンがかかる、誤解を前提とするフォローの様な台詞は面白くもあるが、より注目すべきなのは、その誤解に相当する過去を、家族の側であるのにもかかわらず、永造が想起していることだ。奇妙なことだが、永造にとって不貞行為と家族への献身は両立するどころか、相互補完的な関係ですらあるのだ【交換可能な接続のベクトル】。だからこそ、研究室に居ることが「解放」を意味するのだ。

家族やワシントンと別れた永造は、一度は研究室に戻るが、その後多摩川の橋を渡りながら、見つめているのは、遊んでいる子供達の姿だ。だが、永造に想起されているのは、京子の息子、康彦のことだ。

伊丹はもう子供に母親のことは何もいわないようにしているし、子供の方も言葉に出してききはしない。だが子供の頭の中に、自分のところを去って行った母親が残っている。(中略)母親が結婚したと知っているとすれば、母親の相手のことも考えるであろう。それ

がこの私なのだ。この私があの子のことを心に秘めて今、そちらの方向に歩いているのだ。そういうつながりが、この空間の中に糸で結ばれたようにあるというわけだ。

(110)

永造の中で、陽子と京子は等価であるように、康彦と啓一もまた【交換可能な接続のベクトル】を有している。異なる「空間は糸で結ばれたようにある。目の前で土筆をとっている子供達の姿が康彦と重なり、康彦あるいは啓一の気持ちに筆によって小説に書き込まれ、それはワラビ狩りの場面とも重なってゆく。【象徴的な接続のベクトル】。

47章から始まる妄想の中心は悦子との不貞、想起されるのはワラビ狩りの話であったが、58章で想起されるのも恵子との不貞行為とワラビ狩りである。

48章の妄想の中心は、悦子の身体であったし、その妄想のきっかけは、情人であるワシントンである。51章で初めて三輪家の外に移動するのだが、その用事は、家出を繰り返す康彦の処遇についてだったし、54章以降は、ワシントンとの再会、家族との偶然の出会い、そして58章で想起されるのは、京子の残してきた息子・康彦についてであった。

こうして見ると、48章から58章は、内容面から考えても、少しずつズレながらも、見事に円環構造をなしている。恐らく、章の最後に渡る多摩川の橋という「境界」が、連載時の時制に加速度的に追いつきながら、別の時制へ移行していく象徴的トポスとして機能しているのだと思われる。

59章で物語は急に「夢くさく」なる。突然に「劇場」が現れ、今まで登場して来た人々が次々に「役者」として「舞台」にあがり「芝居」をして

ゆく。

さきの永造の独白は「劇」と「現実」が等位であることを示しているが、この「劇」の世界は、永造が見做した現実世界と同様に、あらゆる人物が「劇」の人物に代わることが出来る。そして、その重なり（越境）は、国籍や時代という時空を越え、さらには性別や動物としての種すら越えてゆく。【交換可能な接続のベクトル】の拡大。

例えば、永造は女になり、女王になり、ロバにもなる。言葉は、詩となり歌となつてゆく。一部で、康彦のことで相談していた担任教師・野上と永造は性行為に及ぶ。現実世界での妄想が、夢の「劇」の中で実現しているわけだ。さらに、永造は突如として馬となり、アキレスとアキレスの馬の話が始める。それは、メネラオスとヘレン夫婦、そしてヘレンを奪ったトロヤの若者パリスの話に続き、トロイ戦争の勃発の背景について永遠と議論を続ける。

一部の「現実」における夫婦という主題は、二部の「夢」の「劇」の中でも継続している。ただ、スケールは急速に拡大し、歴史上の大きな事件までが、夫婦関係の問題と重ねて語られてゆく。

二人の延々と続く議論を終わりに導いたのは、突如登場した白い馬になった永造が二部の物語から、文字通り「蹴り飛ばされ」という事態だ。

そうして作者によって「特別回」と呼ばれる話が始まる。『別れる理由』を書いているという「作者」が、突如現れ、この小説を続ける困難さを暴露し始める。そして永造は、この作者と電話で議論し始める。

作者と永造の電話の議論の後、場面は作者とともに急にあるパーティー会場へと移る。そこにも何故か、永造が現れる。そして、藤枝静雄、柄谷行人、大庭みな子と喋り始める。

こうして、二部から三部に移動して、物語は、中の「現実」を越えて、メタな「現実」に拡大し始める。だが、ここで交わされている会話の内容もまた、夫婦関係についてなのだ。

物語は、『群像』の編集長と、連載をいかに終わらせるかという議論になり、最後は森敦（小島の作品の中では、いつも「月山」の作者」と称される）が登場し、二人の電話の会話によって物語は突然終了する。

こうしてみると、どんどん荒唐無稽な話になってゆくように見えながらも、内容的な常により「夫婦」の問題が通奏低音として響いており、形式的には「会話」と比喩的關係によって、諸々の要素が結びつき合っているのが理解されるだろう。

坪内以降、二章以降の問題について詳細に論じ、新たな解釈のステーションに押し上げたのは、村上克尚の論考⁽²⁾を待たねばならなかったが、村上論の検討及びその後の二部及び三部の検討は、別項に譲ろうと思う。

注

テキストの引用の末尾には、初出単行本（三冊本）の相当ページをあげている。

- (1) 正田雅昭「妻の死に至る「病」あるいは「生き」続ける家族——小島信夫「抱擁家族」論序説」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』72号、二〇二二年九月

- (2) 村上克尚『動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理』新曜社、二〇一七年九月